

# 半導体向け石英に転換

## ヒメジ理化

ヒメジ理化(兵庫県姫路市、赤錆社長)が手がける石英ガラス製品は幅広い産業で使われる。1965年に理化学用などのガラス加工業として創業。産業用ランプやヒーターなどの照明機器を中心に展開してきたが、現在は従来のノウハウを生かした半導体製造装置向けの石英製品を主軸とする。2025年には新工場の稼働を控えており、石英ガラスのモノづくりを軸とした成長を描く。

(神戸・会津陸人)



赤錆社長

ヒメジ理化は13年からの10年間で売上高を約7倍に拡大した。23年度には連結売上高で169億円を達成。これだけの成長を実現した背景には、思い切った

①  
未来けん引する  
NEXTカンパニー

事業転換があった。10年前、それまで主力であったランプ製品が発光ダイオード(LED)の台頭などで失速した。そこで「不採算事業を見直し、半導体向け事業にシフトする」(赤錆社長)を決断を下す。人的資源を思い切った投入、早急に生産体制を整えたことが、ピンチをチャンスに変えた。同社の半導体向け製品は、成膜装置で使われる反応管や洗浄装置に用いるボツクスなど多岐にわたる。赤錆社長は「成膜工程やウエット洗浄工程に使われる石英製品であれば、基本的に自社で製造できる」と胸を張る。



新分野での競争力の厳選は「高い技術レベルの社員を多く抱えていること」(同)。ガラスを溶着しながら成形する火加工は人手作業で、習得▲火加工技術を用いた石英ガラス製品を製造する

## 人的資源を投入、生産体制整える

### 会社概要

▽設立 68年(昭43) 5月▽資本金 6000万円▽グループ従業員 780人▽連結売上高 169億円(23年12月期)

には時間を要する。成形品の大きさや形状に合わせ、壊れないように加工するスキルと経験が必要という。そのため同社では技術伝承に注目した人材育成に注力し、社内制度として加工に関する基礎技術を習得するプログラムを導入。オン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)と組み合わせ、現場や担当によって生じる習得技術の差を減らし、着実な社員のスキルアップを実現する。

同社は26年12月期に連結売上高260億円、営業利益率20%(現状は13%)を目標に掲げる。達成に向けた力ぎは、25年に稼働予定の田村工場(福島県田村市)だ。半導体向け製品の需要拡大に合わせた生産能力の増強とともに、製造装置メーカーからの品質改善などの要求に応える。

加えて同工場では、水素の製造も手がける計画だ。太陽光や風力発電由来の再生可能エネルギー電力を活用した水の電気分解でグリーン水素を生産し、自社で活用する。製造工程で二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を排出しない製品を提供し、サプライチェーン(供給網)の脱炭素化に貢献していく。

◇ 産業競争力の向上には中堅企業の成長が不可欠だ。次代を担う力を秘めた有望企業を探る。(随時掲載)